

Title	個人主義及社會主義局外觀
Author(s)	財部, 靜治
Citation	經濟論叢 (1923), 16(2): 373-399
Issue Date	1923-02-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/127991
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十六卷 第二號

大正二十二年二月一日發行

論叢

資本主義經濟學と自然法則

法學博士 河上 肇

納稅義務者としての國家

法學博士 神戸 正雄

階級に就いて

文學博士 高田 保馬

時論

養蠶業の擴張及び改善

法學博士 戸田 海市

農業不動産金融と一般不動産金融

法學博士 河田 嗣郎

說苑

個人主義及社會主義局外觀

法學博士 財部 靜治

舊岡山藩の社倉法に就て

經濟學士 黒 正 巖

雜錄

地租の改廢に就て

法學博士 小川郷太郎

白耳義ひるに於ける失業保險制度に就て

法學士 一戸 二郎

說苑

個人主義及社會主義局外觀

財部 靜治

序言 一、人類の共通財産としての文明、二、希臘主義及基督教、三、經濟的理想の勃興、四、經濟的理想の衝突、五、國家の神格化、六、獨逸に於ける唯心主義の衰替、七、獨逸の社會主義的國家、八、Bergsonにより救はれたる生物學的哲學の悲觀主義、九、機械的西洋文明に於ける諸問題、一〇、印度により授けらるゝ解決、一一、印度の排斥する諸理想、一二、印度の自治的幻想

世界の新人 Radhakamal Mukerjee 教授が、數年前好著「印度經濟學の基本」[The Foundations of Indian Economics, 1916] を著はし、多方面又該博なる知識を傾倒し、特に經濟の基本を欲望に立てず、寧ろ克己に立てつつ、經濟學系統論を編めるを見、私かに東洋の經濟及社會のため、氣焰舉かれるを痛快とし、又その識見の高きに敬服し、現にその所說の一部を引けることあり（「東亞經濟研究」所載拙稿「印度經濟學論參照」）然るに又構想同様に雄大なる、他の二冊本「比較經濟學原理」[Principles of Comparative Economics, '21, '22] の近著は、公けにせられたり、吾人はその全編の結構及要旨を、紹介するを以て、極めて有用なりと、信する者なりと雖も、今その餘暇を有せざる

を以て、茲には東西兩洋の經濟否文明に關する、比較概論視すへき、第二冊中の一章を譯載し、同書の價值を偲ふの、一助に供することとせり。素より吾人はその所論の全部を、悉く妥當なりとする者に非ず、又その主張に一々賛成する者に非ず、所說中には激越に過ぎ、又整はすとなし得へきものも、含まるゝか如しと雖も、東洋の經濟觀否社會觀を、築かんとする者への資料、尠くとも資料涉獵の指針としては、侮り難き價值あるを、想はすんは非ず、唯吾人は哲學の素養淺きを以て原著者の意を誤り傳ふるものなきを保證せず、讀者之を諒せよ。

一、人間史に關する古觀念は、之を以て進歩の一直路視するにありき、この觀念によれば、歐洲文明を以て、發展の長系列に於ける、最終項をなすものなりとし、支那、印度、又は亞刺比亞の開化は、ありし昔の階段を示すものとなす、かくて支那、印度又は回々教の開化及社會、地球表面より一掃されたりとするも、人間進歩の極致を代表せる、歐洲開化にして、尙殘存すへしとせはそは何かあらん、神は歐洲文明の發展に於てのみ、その身を實現せり、歐洲社會は絕對無缺の觀念を、完全に代表す、されは之を保全する限り、人間史は別に體現せしむへき、何等觀念を有せずとす。

こは Hegel によりその著「歴史哲學」中に、説かれたる社會發展觀念なり、而してそは西洋開化を以て、東洋開化に勝れりとする、現在通有の確信を生むに至りし土台なり、帝國主義はこの觀

念により、擁護さるゝ所ありき、白人が組織優良ならざる諸開化國につき、無規律の經濟的謀求を遂げ、野蠻の暴力と開明の詐欺との、一混和たる諸方法により、世界遠隔の諸地方に臨みて、商業活動に當ることも、之を理由として、至當と辯明されたり。

歐洲諸民族が文明により、含意せらるゝ諸理想の全部を、含蓄せりとするは眞ならず、文明は特殊一民族の獨占たらず、文明は民族的特有物たらず、又排他主義者たらず、人類の共通財産として、何れの民族によりても、各その能に應じて採り納れらるゝ文明は諸種の民族により、示さるゝ諸型開化一切の、調和的綜合及調合を含意す、世界史の發展上各民族は、各別の一開化型を展開せしめたり、何れの一開化型も、充分又永遠なる満足を、與ふること能はず、而も亦特殊の一民族に、文明の諸型を結合せしむること、不可能なり、諸目的間及生存の諸價值間には、大に矛盾せるものあり、文明は人間の赤裸及野鄙を被ひ隠せる染め分けの着物に譬ふべし、ヌディスム經及緯の色合ひは多きも、そは何れも特殊一民族意識の發展によりて織込まるゝ所なり、その中より特殊の一絲を抜き採りても、着物全部としてはその美を失はん、歐洲の理想たると、英又は獨の理想たるとを問はず、一揃への理想を掲げ、之を強ひて詰込むことゝしても、その着物は人目を引付けざるに至らん、何れの色もその他の色取りに、補ふ所あり、その色採り去られなば、全體の美を損ぜん、然るに今日人は、一の開化型を抑制又は抹消し、極めて興味あり又人目を惹くべき

一部の絲を抜き採り、着物全部を滅裂たらしめんとす、されど世界人類は服被せらるゝの要あり、虐けられたる右の特殊民族も、強ひられたる干渉及入れ替の、一時代經過せる後は、徐ろにその原型を復興せしめ、來らんとする幾世紀かの間に、その絲を織込み、元の面影に復せしむるに至らん。

世界人類の理想は、特殊の一民族に體得せらるゝとするも、そはその一部に過ぎず、特殊の一民族として、その理想の完全を、如何に潛勢力的に宿せりとするも、事實上體得せるものは、その數事相に過ぎず、かくて他の民族に對する、一民族の優秀として、不易視すべきもの全くなし、又不易の民族意識、又は不變の民族型視すべきもの、全く存せず、諸民族型は自然的又社會的なる、環境に應酬して、遲緩ながら絶えず變遷しつゝあり、各民族は各別の地理的、歴史的及社會的條件に處し、開化せるも開化に遅れたるも、その特殊意識を發展せしめ、世界人類の一相を展開せしめつゝあり、かゝる觀想によらんか、大小一切の國家に備はる權利、進歩し又遅れたる一切の民族が所有する權利につきての、實際的基礎及哲學を授く、こは輓近帝國主義と雲泥の差ある、一叫びなり、他の諸型開化及社會全部に對する、希臘及チュートン型開化及社會の所謂優秀主張と宵壤の違ある一叫びなり。

歐洲に於ける大戦争は、文明の諸理想に關する闘争として、繰返し又聲高く要求されたりと雖

も決してかゝるものたゞりき、即ち甲は之を以て、獨裁制諸施設と民主制諸施設との、一闘争たりきと説き、乙は男性的に専らなり過ぎたる一文明觀と、文明の發展上參與する所、益々多きを期せんとする、婦人の要求との一闘争となせり、又哲學者 Bergson は同戦争を以て、生命及物質間の重大なる一闘争視せるも、經濟學者 Sombart は、商業精神と英雄精神との間に、争はれたりと言へり、かく諸説ありと雖も、何れかの文明主義を標榜して、最後迄争ひ盡すが如きこと、なかりし事實は依然として残さる。

二、全體としての西洋文明發展上、特に鮮明なる二開化型として、西洋諸國全部に深甚なる影響を及ぼせるによりて聳え立てるあり、その一は希臘主義 Hellenism により代表せらる、その二は基督教により代表せらる、希臘主義の中心特質は、その對稱觀念シメトリイにあり、之がために何れにありても、混沌より秩序界への變改を遂げたり、浮薄にして刹那的なりし諸肉感も、之がために交互關聯あり永遠的なる世界觀となれり、又その觀念により人を、締りある一社會の、鞏固なる構造内に羈束しその輕佻なる諸衝動を抑制し、その人をして全體の生命に就きての、一部分及一片たらしむ、而して外面生活及内面生活に於ける、秩序界の理想は勢力に富み悦びに滿てる生存を生むに資したり。されど人の精神は、満足を續けて安んずるものに非ず、寧ろ疑ひ又怖る、兎に角歡喜に充てるも、肉感的なる生存を、理想の生活として容るゝは、結局人の耐へ兼ねる所たり、かくて一の倫

理的生存を欲求す、而して基督教は此欲求を充たせり、即ち基督教は、目前刹那の生存を斥ぞけ、人を無窮の生命に、引入れんとせり、かくて一大變革は遂げられ、敏感なる感情、衷情より發せる同情心は、深き理解及強き熱誠と、提携して進み行けり。

されど基督教の理想主義は、世界を動かし、之をして淨土たらしむること能はざりき、際涯なき愛及犠牲の王國たる、一新王國は建てられしも、そは思想に於て然りき、行爲の世界は之に影響さるゝも、不充分たるの事情を續けたり、即ち基督教は基督教國民の、社會生活産業生活に、地歩を占め得たりとするも、そは輕微に過ぎざりき、商賈道德は基督教道德とは、全く異れりど假想せられ、外交術は耶蘇の十戒を倒まに棹して進む、朝露的生存を多少排斥したる、基督教をれ自體は却りて朝露的生存により排斥せられ、主として狹量又抽象的なるの事情を續け、政治生活産業生活に於ける、一活力たり一活力力たり、得ざるに至れり。

晩近の時代は、過度に超經驗的なる、一流義の思想にては、満足せず、一新哲學一新宗教を建設することに熱中す、進化過程に於ける最終極致の產物たり、又自體の存在につきての支配者たる人は、何等の先驗的主張を採用することなく、生存を凡てその完備せる儘に、理解せんと努む、諸新哲學及諸新宗教は現に作成の途上にあり。

希臘羅馬ゴチック混成の文明は、一發展過程の結果、歐洲を通じ社會民主制の、樹立に向ひて

進むの趨勢を示せり、歐洲に於ける政治的社會的諸施設の統一は、社會民主制の理想により代表さる、而してこの理想中には、第一に俗衆の諸目的諸理想存する所に従ひ、社會の生存に規律を加ふべきことを含意し、第二に經濟上の改良は生存の統括目的たることを含意す、歐洲はこの理想につき、統一を得たるの一特色を確保せるも、別に又之が實現の諸方便及方法は、その理想に鈎合はざるの、一特色をも示せり。

希臘は歐洲に民主制を授けたり、されど希臘觀念にありては、藝術感念により左右されしを以て、經濟上の諸目的及諸活動は、輕視せられたり、基督教は神の王國を、專念せるを以て、經濟的理想に不利なることは、前者以上たりき、羅馬の文明はその初め、嚴格なる質朴と、武勇の諸徳尊重とを、その特色となせるも、帝政羅馬は奢侈逸樂に耽ることとなり、無神論及耽溺生活の奈落に陥れり、又羅馬法は諸私權に、重味をおくこと過度なりしより、歐洲文明に一の惡傾向を與へたり、而して基督教及基督教の共產的理想は、淫風瀾蔓せる雰圍氣内に於て、全くその地歩を失ひたり、中古に至り幾多の僧院は清貧及質朴の理想を、保維増進する點に裨保し、一時の間經濟貨物を著しく輕視したり、その時代は諸都市國に於ける、大伽藍建築の時代たり、又繪畫彫刻美術の、大發展を促せる時代にして、その間藝術及思想の幾多大派を生み、終に Dante に至り、両者の極致及綜合を、見たるの時に迄及ぼされたり。

三、されどこは永く繼續し得べくも非ざりき、即ち諸藝術、工業、商業、及銀行業は發達し、而もその初め伊太利に於ける、多數都市及國家に於てせるもの、後には歐洲を通じて之が發達となり、經濟的改良の理想は、夙に文物復興期にも窺はれたり、次いで諸探檢となり、又新大陸に於ける諸發見、特に貴金屬の發見に伴ふに、國別無視經濟に對立せるものとしての、國民經濟勃興を見ることとなり、新國家經綸策は先づ西班牙に生れたり、第十七世紀中にありては、かゝる國家經綸策重きをなせるの事實は、佛蘭西に於て國家の採用せる、重商主義の政策により示されたり、而して Adam Smith が經濟的成功を、文明生活の目的視し、生活標準の向上を計るを以て、あらゆる進運の發動力視し、學問、藝術、教育、及宗教に於てさへも、亦然りと説ける當時、歐洲全部は經濟的理想により、飽充せられたり。

經濟的理想を、俊位に立つることは、特に綿密にして過度に技術的なる、文明の發達により支持せられ、人氣迎合的藝術及功利主義の倫理は、何れも相次いで之に助勢したり、かくて遲緩なる史的發展過程の、所産たりし右の優勢理想は、歐洲を通じて一様に採用せらる。

Croze が *economica* と呼べるものは、歐洲に於ける普通實際生活形態につき、その特色を示せるものとすべく、それは基督教により示されし思想と、反對なる思想の流儀を代表す、而して佛蘭西革命と、自由、平等、及博愛とふその理想とは、萬人を以て自由又平等なりとする、原則

の確立を目的とし、この平等の原則と、生存の目的たる經濟的改良の理想と結びて、社會主義は興れり、即ち歐洲が佛蘭西革命の遺産として、得たる社會民主制は、經濟的理想に案内せられし結果、社會主義の諸目的諸方法を生めり、歐洲文明の神髓をなすものは、基督教に非ずして、社會主義及社會民主制の諸理想なり、東洋及未開諸人種中、歐洲文明移されて新勢力範圍をなせる所にてその初め耶蘇教により、民衆の理想を風靡するの狀あるに拘はらず、頑強に社會生活を震撼せんとし、社會的構造の根柢に革命を及ぼさんとするものは、恰も社會民主制と之によりあらゆる政治的社會的不平等を、なで倒さんとする觀念とにあり、加之土民がその思想を、會得するを待たずして、その事蹟を擧げんとす。

四、されど又歐洲に於ける 社會民主制の諸方法につきては、乖離否拒反を伴へり、その一乖離一拒反そのものとして、史的發展の產物なり。

個人主義及自由は、歐洲が Athens より得たる遺産なり、統一及社會主義は、歐洲が羅馬の遺産として得たる、秩序の理想より、湧き出でし所産なり、過去の哲學者政治理論家は、數世紀に亘り、個人主義と社會主義との、相容れざる要求を、唱導しつつありき、Plato 及 Aristotle より Spencer 及 Hegel に至る迄、社會と個人との、仇敵關係ある諸要求を掲げ、之を調和せしめしめしたり、されどその間何等の妥協點なく、何等の落着なかりき、個人主義の思潮と、社會主義の

思潮とは、交替して世を風靡し、その間内部の衝突につき、何等の解決を下せることなかりき。

一型の社會學的思索にありては、個人の諸權利は、神聖にして犯すべからざるもの視され、社會は個人の衆庶に、外ならずと想はる。Milton, Hobbes, Locke, 及 Rousseau の社會契約説、並に Spinoza の學説は、一様に個人主義の土臺に立脚し、各個人をその同胞と引離し、民事社會の起源を解釋せんとして、人の本性以外に何物かを探す、就中前者は之を勝手なる一契約に求め、後者は之を只管暴力に歸す、Bentham の功利主義學説も、同様に個人主義的假説に立脚し、社會をその組成原子に碎分し、立法の目的として、社會全體の福祉を擧ぐる代りに、各別なる個人享樂の總和を掲ぐ、Darwin による自然淘汰の原理は、競争する個人の隔絶及獨立を誇張し、その原理を社會倫理に及ぼせる結果、立法者の罪惡に關する學説、又は Herbert Spencer の小論集、*Man versus the State* の表題により、着想されたる謬對偶を、生ましめたるにつき責なしとせず、社會契約説派の自然權利につきても、Mill 及 Herbert Spencer による、個人自由の不可侵説につけても、Rousseau の國家觀上、之を個人意志の總和視せるも、又功利主義の法律觀上、之を個人満足の總和視せるにつきても、數十年間一派の歐洲思想を支配せし、個人主義の算術的機械的學説は、その凡てにその神髓を宿すを見る、而してこの個人主義暴戾を窮めし結果、近時に至り無政府主義を、個人自由の城塞として辯護し、又 Bolshevism を勞働の諸權利保護の、一方法とし

て辯護するに至れり、社會生活にありては個人主義のために、婦人參政權の叫を高め、婦人が人の母として有すべき、諸義務につき相當の承認を與ふることなし、佛蘭西にありては、同じ不道德的個人主義のために、婚姻率の減退を生じ、民族保全の一層重大なる國益に悖れり、又佛國に多數の賛成者を得たる Syndicalism は、社會を之が組成元素たる、諸群及諸單位に分解せり。

Syndicalism の理論家又は浪漫主義者たる、Georges Sorel をして言はしめんか、曉近社會は力、即ち資本家の力を土臺とす、而して暴力により、政治組織を粉碎するを以つ、Syndicalism 實際運動家の目的たらしむるの要あり、諸施設諸道德を悉く破毀せんか、有力にして斬新又無疵なる何物が残存すべし、そは適切に説かば、革命的無産者の精神たるべきものなりとす、かくて現在停滯し替廢せる社會に於て、阻止せらるゝ進歩も、無産者の暴力により、その行進を再興すべしと宣言せらる、佛伊に於けるかゝる Syndicalism 運動家のみならず、愛蘭 Uster の聯合論者、婦人參政權擴張論者軍、石炭坑夫も、國家の安固及連綿にとり、極めて危險なるが如き、一態度を一様に示せり、國家を諸群及諸單位に、離散せしめつゝある同一個人主義は、藝術、文學及宗教にも、亦その影響を及ぼせり、即ち藝術及文學は、一般に承認さるゝ、法律道德の標準を無視して、個人的自尊的となり、社會の諸弊諸惡を摘發し乍ら、之を救済するの目的を以てせず、社會をして社會自身の眼に、可笑しく映せしむるの、目的を以てしつゝ、自から慰む、實に藝術家が、

自己と世俗群衆との相違を力説し、否かゝる相違に想到するだけにても、快樂を感ずるの風ある所、又藝術家が、自覺せる所極めて空虚にして、奧秘の諸關係及諸必至による、影響を全く感ぜざる時、確にかゝる類廢的一藝術あり、一の Bernard Shaw 一の Daudet 一の Flaubert による藝術あり、宗教さへも超然として、俗界と交はらず、神秘主義の名目に趨るを見る。

五、歐洲にありては、盾の反面も亦發見せらる、即ち誇張されたる一言説は、秩序の理想に對して下さる、夫れ一六八八年の英國革命は、個人主義思潮第一興隆の符牒たり、佛蘭西革命は之が絶頂視され得べき所なるが、同様に普佛戦争は、合衆主義思潮第一興隆の符牒にして、最近の戦争は、合衆主義の絶頂視され得べし、獨逸に於ける哲學的傳習の流れは、絶えず國家を宣揚して、開明事業の指南車たらしむるにありや、Spinoza は民衆が神に誓はず、その國土の福祉を、誓はんことを希望せり、Fichte は立言せり、「公民の間に漸次國家觀を入込ましむるは、現時代の政治的特色なり、素より吾人は自由を希望す、否之を希望すべきなり、されど眞の自由は、法律への最高從順を、その方便とすることによりてのみ、達せられ得べし」と、Schelling によるも亦、組織づけられたる社會としての國家は、それ自體一の目的たりき、かくて Treitschke は彼に關して説けり、「彼が完成されたる、歴史の世界視せるものは、國家なり、そは個人の意志以上に、高く揚げられたる一大作物にして、それ自體一目的とせられ、かくて外部實在界に於て、必至及自

由の調和を現實せしむ」と、されど國家觀を十全の域に、説き擴げたるものは、Hegelの哲學なりき、Hegelは佛蘭西革命期を通じて生存し、自由の名に於て行はれし、諸罪惡の重大なるを實感し得たり、獨逸の政況は又伊太利に於ける、Machiavelliが教へし如き、教義を必要としたり、獨逸名義によれる神聖羅馬帝國は、一の抽象に過ぎざりき、萊因河以西の諸州は、獨逸より喪はれたり、Hohenlinden 及 Marengo に於ける災難は、尙各人の記憶に新たなりき、獨逸の諸小國は絶えず、交互に陰謀を環らしつゝありき、而して Luneville の媾和は、失政及不秩序を、定型化せしむるに資したり、かくて一國即ち普魯西を以て、優秀なりとするの要求を、辯護するの實際的必要ありき、是等の史的條件あり、Hegelが國家の偉大に關する自家の觀念に、誇大の言明を附與せるは、故ありと謂ふべし、Hegel によるに國家は、具象的自由の實現なり、その自由は「國家組成員の特殊利益と、人としての人に比較的普遍的なる、諸目的との活合一なり」、又「一國の強弱は、その諸部分を適當に結束して、單一の政治的勢力たらしめ、かくて事々物々をして、共同防衛のため有用たらしめ得べき、仕方によりてのみ決せらる」、國家はそれ自體の威力以外何等の確定威力を認めず、その大權は君主 Leviathan の、大權と同じものたり、されどその威力を生ずる基礎は、platonic king のそれたり、即ちそは單純なる暴力に非ずして、寧ろ「偉人の崇高なる力」なり、民衆は悦びて主君と呼び、その意に反するも服従すべく、神と仰ぐべき人の力な

り、かくて國家は Hobbes が説ける如く「死す可き神」たらずして、眞實に不死の神たり、「神は國民的元首なり、國民的生活なり、この神の前には、一切の個人をして、自己の諸相違に無頓着たらしむ、一のかゝる論理的生活は、絶對眞理、絶對開化、絶對無私なり、そは何等の假面なき、神の絶對的實存在たり、又即座に然り」とせり。

かくて國家は「人の精神の、永遠的必至的實現なり」そは「最良種の個人的活動を、生むの一條件なり、」唯 Hegel は官僚的見解上、國家を一機械視し、その機械には機械仕掛の殘餘全部を、運轉せしむべき唯一發條を備ふと、なすには同意せざりき、生氣なき木石的常套は、彼れの嫌へる所なり、素より Hegel の哲學は、國家觀を最も完全に説き擴げたるのみならず、同時に又個人をも、出来る丈け生かしめたり、即ち彼は國家の義務を限定せり、「内外の安寧を全うするの力を、組織し維持するため、直接の必要を告げざる事々物々は、中央政府により、公民の自由に委ねらるゝの要あり、この自由はそれ自體として、神聖なればなり」と。

六、Haldane 卿は曾て、Hegel の政治的義務學説が、現代の獨逸政治界に於て、最良たり又最も貴重なるもの全部の、根蒂に横はると論ぜり、されど後世哲學者及理論家の、手に弄はれし結果、Hegel の哲學は、この大哲學者が、少しも同情せざりし、理論及行動辯護の用に、供せんとせられたり、Hegel は言へり、義務及權利の合體は、國家の至要なる特質の一なり、而して之が内部の強味

をなす、個人は自己の義務を盡すにより、自己満足を求む、かくて個人と國家との關係より、一權利は湧き、從ひて公事も個人自身の事項たるに至ると、Hegelの見解上、一國家にとり肝要缺くべからざる、最小限視さるゝものは、右義務と利益との合體なり、そは組織立てる強味、集中又合一されたる力として、國家てふ眞建物の礎たるべきもの、土臺なり、されど「經驗的目的及諸結果と、引離して説かるゝ義務の福音は、智能を瞞着するの傾向あり、之がため諸結果につきての、洪大にして又行渡れる調査の結果、洞察さるべき理性の事業は絶え、之に代りて内容空虚なる、内面の一意識は起り、かくて現存せる社會的威力の諸要求に、合理の形式を粧はしむ、」かくてHegelの政治的義務學説は、普國官僚制の獨裁的諸要求をも、至富ならしむるものとせられたり又獨逸に於ける唯心主義は、唯物主義及武斷主義の増進により、漸次蔽ひ隠されたり、Hegelの後 Feuerbach の、形而上學的唯物主義は勢力を占めたり、Karl Marx 及 Engels は、歴史の經濟的一解釋を授け、かくてその以前既に過度に技術的なる、獨逸文明の一結果として、高く擡頭しつつありし、現實主義及唯物主義の思潮に助勢したり、又増大し行ける獨逸の大工業制は、唯物主義的諸傾向を、増長せしむるに資したり、獨逸の一學者は評論せり、「人口の大部分がその住居を農村より諸大都市の、工業中心地に移せるに際し、家庭の諸信念、その宗教、その道徳は、悉く取殘れたり、然らずんば引續ける移住を見たる間に、全く失はれ行けり、一八七〇乃至九〇

年の期間内に、起れることは、取分け民衆が、宗教的舊觀點への接觸を、失へることなりき」と、村に於ける家族の崩壞、次いで基督教の家族訓練の倒壞は、聖書の評論、並に基督教及基督教倫理につきての、増大し行ける不信仰と提携して、その歩を進めたり、特に普魯西が武力一點張り、Macchiavelli 的政術とを頼みとし、俄かに偉大國の地位に上れるの事實は、それ自體として人心に、浮び出づべき一現象たりき、かくて又從前に於ける唯心主義の、瀕死的痕跡を掃ひ去れり、されば Windelband は巧みに言へり、「比斯麥の時代は、偉大なる詩をも、適切なる哲學をも、全く生まざりき」云。

七、吾人は既に不道德的個人主義の、有害なる結果を釋ねたり、粗大なる合衆主義の弊も、一樣に鮮明なり、「個人の生存が、近時に於けるが如く、國家により國家自體の目的のために、甚しく規律されたることは、殆んど未曾有なり、官僚制とその緩漫なる、常套及一律の嚴命とは、今や個人の諸特色及諸相違を、悉く掃ひ去るの傾向あり、國家社會主義は、その中に含意せらるゝ、一切の煩はしき干涉を施し、全國民を武裝せる一軍隊に訓練す、國家は、全能の社會的群となり、個人の生存は多少、軍事的産業的一機械の、部分に外ならすとして數へられ、國家以外のあらゆる社會的成群及組織は國家の目的及利益に、屈從すべきものとせらる。

合衆主義學說の分度を過せるは、かくの如きものたりき、ために公民を社會的機械の、單純な

る商車に引下げ、之をして機械の命する儘に、運轉せしむるの傾向ありき、公民を侵略的國家に有用なるが如く訓練するは、教育の目的とせらるゝの傾向あり、藝術は社會の目的に、媚ぶることを努め、倫理は國民が軍事的成功のために、頼みとなし得べき、武勇の諸徳を啓發すべきことを鼓吹し、學問は産業的軍事的有能を生むべき、諸方法諸手續を發見するに努む。

輒近歐洲思想は、二大流に分たる、その一思想型にありては、外界のあらゆる制限との比較、個人を以て内面の一無限を代表するものと考ふ、素よりそは快樂主義者及功利主義者が、個人を觀想せるが如く、目前に存在せる個人に非ず、かゝる個人に獨立なく、自包括なければなり、かくて假令は Fichte は、自我のみ實在たり、世界は一觀念なり、自我の一表現なりと觀想し、Schelling は異なる一音調により答へたり、世界は實在なり、されどその神髓は、自我なり、内部の我なりと、こは文明上個別的なるものの全體に、可能的最大進歩あり得べきことを、主張する一態度たり、されど個人主義は主觀主義に、没入することとなり易く、かくて個人は精神的世界を賴まず、自己目前の存在を、頼みとするに至る。

かくて他の一態度は起る、即ち個人は世界に蒞みて、自我を棄つ、Spinoza は至上の靈を觀想せり、その觀想上自我は、全然寂滅たりき、Hegel の哲學系統も、かかる態度の最良體得なり、Hegel によれば世界は、觀念の實現なり、文明の歴史は觀念の發展なり、而して Hegel の思想

系統は、その限界以上に擴げられ、輓近の歐洲生活に、深甚なる影響を及ぼせり、人々は様々に必勞し、困惑し諸民族は興亡するも、その間文明は結局、徐々に進みつつあり、文明のために骨折る人々の生命及勞苦は深き意義を有すとするの確信はその地歩を確立せり、文明は増長す、されば世上古きは新しきものに譲り、諸民族は興隆し衰亡し、幾多の葉は凋みて散落するも、樹木は萬代を通じて生茂す、世界の生命に於ける永春にありては、文明の常緑あり、新鮮の花は常に咲き出でつつありとす。

されどこの思想系統は、心を引付くるが如きものあるに拘はらず、受入れ得べきに非ず、個人は世界生活の抵抗し難き流れにより、流し去らるゝとせんか、個人は何事かを創造し、個人創造の悦びは、何處にか存せん、個人はその自我を犠牲に供するも、その終局にして、その人にとる不詳なるべしとせんか、その犠牲に何の意義かあらん、個人は自己と文明との間に、一の内部關係を結ぶこと能はずとせんか、文明はその人により何の意義かあらん、個人は生命及精神を喪へる操り人形に過ぎざらん。

綿密にして過度に技術的なる、歐洲文明にありては、人は社會的機械の、複雑組織に於ける、一齒車に引下げらる、彼は絶えず廻りて、少しも休まずと雖も、何がために運轉するかを知らず、運轉するは彼の知れる事たらず、又彼の悦びたらず、彼は如何に無意義無力なるかを感ず。

八、晩近生物學の教へは、人の無意義無力を力説せり。自然は長年月に亘る一過程を経て、一生命型を創造し完成し、次いで他の一型は創造され、かくて後者は前者を殺す、生存競争に勉めて、多くのものを犠牲に供し、勝利を占めたる種は、生存する以外に何等の目的を有せず、生存競争は極めて殘忍たり、死を免かれて保全する以外に、何等の生存目的なし、進化過程の頂點たる人は、その身體の構造及心的才能上、全然遺傳及環境により決せらる、人は何等獨立の存在を有せず、生存の發展は殘存への競争上、殘存すること以外に、何物もなし、それ自體として善なりとすべきは全くなく、眞なるもの存すとするも、生命の保全を助くるに、適せる程度に限りて然りとす、かかる觀想は全體として、行渡れる悲觀主義を、惹起せしめずんば非ず、人は單純なる自然に縛られ、人の勤勞及闘争は、生存否身的存在の保全以外に、何等の目的を有せず、人は動植物が、單純又容易なる仕方により、仕遂ぐるものを、一層複雑なる方便により、仕遂ぐるに過ぎずかくて Huxley は大膽に主張せり、倫理的過程は宇宙的過程に代るも、人力克く唯物主義及悲觀主義の流れを、阻止し得べきに非ずと。

Bergson が現在歐洲の思想に、及ぼしつゝある大影響の秘訣は、彼が晩近哲學を、機械的進化學說の諸概念より、救ひ出せる點にあり、機械的進化學說は、内面の一衝動、内よりの發展、全體による一發展あることを拒む、之に反し Bergson によるに、生命は元來創造的進化の一過程

なり、意識が生命の流れに併はされんか、倫理的過程及宇宙的過程の衝突として、Huxley を大に惱ませるものは、既にその終局にあり、而して生命の秘訣は發見せらる、Bergson によれば倫理的表現は、生命を傳承せしむべき、變轉の一助援となる、Bergson によるに「目に見えざる命根として、一切の生物を續々傳へ行かしむべきものは、恍惚として描かるべき幻想、時としては果敢なき一幻想として、吾人の眼前に現出せらる、母の慈愛の特殊形態にありては、之に先ちてかゝる突如的啓示あり、そは大多數動物にありては、甚だ著しく又甚だ悲壯なり、そは又植物がその種子のために盡すべき配慮にも類はる、一部の學者が、生命の大神秘視したるこの愛は、寧ろ生命の秘訣を、吾人に洩らすものとするを得ん、之あるがために各代は續くべき代のために、心を傾むくることを知る、之あるがために又俄かなる一瞥によるも、一生物は特に客旅の一分際たり生命上肝要視すべきは、生命を傳承せしむべき、變轉に存することを知覺せしめ得べし」。

九、右の言説上個人は、再びその獨立を失ひ、宇宙内に埋没せらるゝを見る、されど Hegel に於けるが如く、宇宙觀念内に沒せらるゝに非ずして、宇宙變遷の内に然り、要するに西洋にありては、至上の靈に關する、學説を見るに非ずんば、即ち感覺論又は快樂主義を見る、義務に關し絶對的範疇的嚴命に關する、福音を見るに非ずんば、功利主義を見る、超經驗的たり、世俗を絶對に斥くべき、基督教を見るに非ずんば、即ち實證主義及人道主義を見る、人は獨立して増長し、

文明と隔絶するか、或は文明により、人を單純なる一方便に、引下ぐるかなり、個人主義に非ずんば、合衆主義たり、人の自然權利たらすんば、國家の神權なり、Bolshevism 及 Syndicalism たり、國家及社會を諸群及諸單位に、分解するものならずんば、「地上にあるも尙神的」と、想はれたる國家の、莫大なる力及強さ、并に個人的諸特色の引下げ平準、及天才の抑塞なり、超人の離群的偉大たらすんば、即ち凡人の活氣なき、平準なり。哲學に於ける個人主義は、主觀主義に没入し、かくてそは社會生活にありては、社會的平準を紊せる、放逸を意味し、經濟的範圍にありては、強者による弱者の利益壟斷を意味し、諸問題中の問題となれり。又哲學に於ける合衆主義は、義務の一幅音を作出せるも、その内容は空虚にして、現存せる社會的威力を、神格化せしめたり、そは社會生活にありては、半武斷的官僚制を意味し、經濟生活にありては、産業の規律を意味し、又階級及民族の私慾的利益を、擁護し支持すべき、一機械の齒車に勞働者を引下ぐることを含意せんとす。一層近時に至り、大規模なる婦人勞働の採用、the Military Service Act 及 the National Service Act の制定、國家社會主義の方針により、既に採用されたる諸大方策、數事例につきての賃銀及物價公定、他の事例に於ける產額制限、強制仲裁全國の一大學制の採用等は、西洋文明により遭遇せられし、合衆主義の顯著なる事相たり。

以上說ける所は、單純なる機械的文明、單純なる機械的一社會に、避け難き拒反及衝突なり、

西洋人は、一個人主義者たるを、一合衆主義者たるを問はず、彼にとりての社會は、一の大なる機械なり、個人をその社會に結びつべき束帶は、機械的なり。

個人と社會文明との衝突により、惹起さるる諸問題は、内心の一幻想を、借ることによりてのみ、解決され得べし、從來單純なる機械的開化に伴ふ、不可解の問題とされたるものを、解決し得べきは、精神的、一意識のみなり。

而して印度は確かに、その内心の幻想、その精神的意識を、授け得べし。

一〇、蓋し印度に於て、努力の目標たる綜合的理想にありては、人は文明の事業に、關與することを實感す、而してその文明の事業にありては、彼が抵抗し得ざる生命の流れにより、導き去られつゝ心にもなく不詳なる諸目的を、達せんとするが如きことなく、寧ろ彼自身の目的を、實現せんとす、加之彼は精神的、生活より得たる、諸目的、諸理想の一意識に基づき、歴史及社會を統制し、指導すべし、彼は俗界及精神界てふ、二世界の間に介在す、精神界は獨立なり、そは眞、善、又美の世界なり、印度にありては人は、不易の一精神界に根ざれ、行動し指導すべき感應力を、この精神界につきて發見すべし、發展及歴史は彼の幻想よりせば、自己の諸目的實現たり、人として耻づべきものなき becoming 域に達するの過程たるべし、彼はその精神的自我を、人間史内に於て、又之を通して表明すべく、文明は實際の意味に於て、彼の手細工たるべし、かくて彼は

目前存在の世界を、實在として受入れ得ざることを、發見すべく、而も亦この目前の存在に於ける、諸制限を忍びつゝ、精神的自由を實感するの要あり、從ひて基督教徒に見るが如く、俗界を否定することなく、現世に授けられたる、粗野にして無明なる存在に處し、その精神的生活を送るべし、その生活には、倫理的努力を含み、人は艱勉す、目前の存在以上に解脱し、世上の物質的事相を物ともせず、之を精神への奴隸たらしむるは、彼の義務となる、内界の存在と、外界の存在との鬭争より、藝術は湧き、その藝術は内界の表明として、粗雑又醜なる外界を、その外面以上に高め、かくて生存の圓頓を達成せんとす。

一一、社會生活及社會的諸施設は、一樣に内部精神界より發せる、諸概念により規律せらる、印度は社會民主制の、理想を排斥すべし、之によれば單純なる物欲追隨者たる人を誇大に力説するの譏りあればなり、印度は經濟的理想を、生存の主宰目的として採用せざるべし、之によれば單純なる物欲の、要度を誇張し、又事々物々を效用及力の、名義によりて勘定し、又事物競争觀を助勢すればなり、印度は内面の諸必至諸關係を、放擲せんとする、個人主義を排斥すべく、又個性を抑塞し、創造的天才の奇拔を阻止すべき、合衆主義及國家社會主義を排斥すべし。

一二、印度は自治主義を主張す、社會的一骨組社會的一理想として、その自治主義を説くの基礎及支柱とする所は、印度に於ける宇宙の人性觀の、深遠又意識的な實現にあり、而してその人

性觀によれば、個人はその主觀的及客觀的經驗の全部を、自然及人類の鼓動せる生活上、表明する、が如き神との、一關係又萬端不足なき關係に照して、左右すべしとなす、又社會に對する個人の關係は、有限なる一切の事物につきて、無限を觀じ、多數につき一つを、又一つにつき多數を觀すべき、彼れの幻想により律せらる、即ち彼はこの幻想により、社會が一層大なる靈たり、又一層大なる威壓的人格たるを實感し、かくてその一切の主觀主義は、之に面するときは、洞みて無力となる、彼にとりての社會は、示現されたる神なり、時及歴史を通じて、動き行く絶對は、中間存在としてこの社會を有す、事實上不易なる絶對は、人間界に示現し、時及歴史の諸條件に左右さる、社會への各貢獻は、有限となされたる無限にして、無限の實現に進むの一步なり、而して無限は實在の自我なり。國家は先驗的諸理由に基つき、萬能視さるべきに非ず、國家の指揮に附與するに何れかの先驗的なる、道德的有效論を以てすべきに非ず、國家は一個人が所屬すべき、諸群の一視さるべきなり、國家の指揮として、服従を要求し得べきは、その指揮が國家に對する可能的反對者、即ち他の自治的群として、その公民を一組成員とすべきものの、指揮に比し、倫理的に高尚なる場合に限り、二者衝突するときは、その公民は道德的理由に基つき、選擇を遂げ得べきなり、自然的精神的諸關係より、湧出づる社會及自治的諸群は、人の服従を求むべし、而して之に服従しつゝある人は、己れの實在自我に、服従するものたるを實感すべく、かくて遠

く隔てたる、目的論的神又は一觀念にも、一の國民奴隸化國家、服従を命すべき一征服者の子孫にも、服従するものに非ざるを實感せん、自治的諸群は私的人格をして、最も獨立不羈なる、暢達を遂げしむべく、同時にこの個人を引直して、社會的人格と事實上合一せしめ、又之をして社會的人格實現の、一方便たらしむべし、かくて自治的諸群は何れも、性格を最も完全に啓發せしむるに資すべし、確實又正當なる唯一の國家發展は、自由なる自治的諸群の、一競技場により代表さるゝ、一國家に之を見るべく、その諸群は相互義務の結束により、結合されたる一共同政治體に加はりて、自主的又全面的なる部分をなすべく、その結合の目的は、侵略的膨脹及利益誅求のためならずして、一の精神的文明上偉大とすべきものの全部の、創造及分布を謀り、之に相應して個人的人格及社會的人格を、富ますことに存すべきなり、特殊の裁判權を有すべき半獨立の是等自治體は何れも主權に關與すべし、而して法律の起源及效力は、中央機關の命令に基つて是等團體任意協力の間より、生るべき社會的道德的傳習の系統を、土臺とすべきなり、かゝる法律は、國家により承認又批准さるべく、その國家は番人及後見たるべく、又經濟的產業的宗教的團體の形式によると、その他の組合形態によるとを問はず、無限なる諸機關の何れに對しても、その傳習を維持するに資すべきなり、西洋に於ける國家は、村落共產制又は自由都市の、發達を謀るよりも、寧ろ貢物を課し又納むべき、侵略者及征服者の子孫となり過ぎたり、民衆の自由は、

厭ふべき治者の下、苦き内亂及鬭爭により、奪ひ去られたり、東洋にありては政治的自由は、村落共和制の土臺に立てられ、自治的諸群、諸權利、及諸自由は、一不文法及一憲制により樹立せられ、その憲制は精神的及物質的遺産に就き、各々その能に應じて、均霑し得べく仕組まれたる民衆へ對し、智能による自由の賜として、授けられし所なり、自治主義は政治上にありては、諸國及諸國民協力の理想を主張し、主戰主義的帝國主義の、大望及侵略を唱へず、又漸次官僚制を進め、人生の些事を監視し規律し、かくて民衆の秩序を維持するの力を、漸次擴げ行くの理想を唱へず、諸範圍に於ける協力により、それ自體の事柄を、規律するの力増され行くべき、一開明自治體を理想とす、かゝる一共同體は因襲的教育、及機械作りの政治に誘ひ去られつゝ、小村落の諸急務及利益を譬けるに至ることなかるべし、寧ろ自治的としては第二段的たり、その組織は民主的聯邦的たる、民衆の一國家内に於て、その自村、自市、自地方の政治に、能動的に參與し、中央政治組織と獨立し又並立して、自治體及地方議會により、直接なる政治的活動の本源價値を維持し、同時に又國家及國民以上の、一層偉大なる精神界に、一層多大なる注意を注ぎ、一層偉大なる生活を、達成せしめ得べき唯一の力たる、個人の行動範圍を大ならしむべし、自治主義の主張する社會觀は、俗人的機械的たらずして、精神的有機的たり、家族及同業組合、産業的その他の職業的群、精神的同胞譚及村落共產制は、個人が有機的精神的結束により、結ばれて成れる團體なり、凡て是等の團體並に國家は、文明のための繁多なる願望として、物質的たらず精神的に高められたるものを充たすため、個人のために必要なるべく附帶たらざるべし、閭族、階級、

同業組合、村落團體及州は、各別に特殊の男神女神を有し、周期的精進及祝祭にありては、講員會合して、一齊に有義の宗教的感動を吐露す、印度は一神教を信すべきも、眞の一神教は、多神教及多元論により、内部の強味及満足を取入る、印度は國家社會主義、及一路を逐ひて進むべき國家組織を信せず、個人的社會奮發の各範圍につき、個人的社會的人格の啓發を、促すべき無數の社會的群が、任意に協力することに、強味を發見せんとす、印度は神中の人を信せんとするも、別に又人中の神により、神智を引出さんとする、かくて印度は超人、詳言すれば偉大又深智なる靈として、社會に貢獻するため、それ自體を自治的同胞講 *sanghas* に合成し、かくて萬人の心に對する信仰を、その身に固く繋ぐべきものあるを、信せんとす、是等超人の箴言とする所は、「冒險的に渡世せよ」「汝の隣人を容赦するな」とするに非ずして、「渡世し渡世せしめよ」「汝自身を愛する如く、隣人を愛せよ」とするにあり、人の諸弱味及薄志は、超人により強味及力となるべし、潤澤なる愛及深き同情に培はれんか、苦痛及窮乏も、無知及弱味も取去られ、凡ては偉大又善良となるべし、社會生活に於ても、個人間に於けると異らず、茲に寄生的財力主義帝國主義を見ず、又強者による弱者の、壓迫及誅求を見ず、相互補助及助援あり、強者は弱者に力を貸し、弱者は強者につき力を發見し、かくて地上に泰平及誠意を要求し支持すべき、諸階級諸民族の協力あり、そは印度宗なり、誤れる文明のため、階級鬭爭及諸國戰爭により顛覆されし、煩惱及憎惡の世界に處する、印度の信仰及印度の幻想なり。